

「利用者さんの身体に合わせた食事について」

2年7組 14番 加藤桃香

19番 坂本優紀

実習施設：特別養護老人ホーム清山荘

問題設定

私たちは、食事介助の校内実習をやらずに知識だけで実習に行きました。学校で学んだことで、よく使われていた言葉が“残存機能を活用する”という言葉でした。

利用者さんの残存機能をどのように活用し、食事介助ができるかを、職員さんの介助している姿を見たり、自分が体験しました。その工夫点を二人の利用者さんを例にあげて発表します。

介護場面の実際

<Aさんの場合>

- ・メインの食べ物はペーストで副菜などは刻み食。（図を参照）
- ・自力でスプーンを持つことは可能だが、食べ物を自分の口に入れることができない。
- ・ほぼ全介助。
- ・口の中に食べ物を溜める。
- ・話に夢中で食事に集中することができない。

～工夫点～

- ・次の食べ物を口に入れる前に、口の中に食べ物が入っていないか確認。
- ・スプーンの柄の部分で介助者と一緒に持って食べる。
- ・口の中の食べ物がなくなると話し始めてしまうので、話し始める前に次の食べ物を運ぶ。

<Bさんの場合>

- ・食べる意欲はある。
- ・刻み食、飲み物はトロミ。（図を参照）
- ・口の中に食べ物を溜めてしまう。
- ・飲み物を飲むときに口から出してしまう。
- ・食べる前までは時間がかかるが、食べ始めるとよく食べてくれる。

～工夫点～

- ・刻み食をさらにスプーンで細かくする。
- ・口の中に食べ物を入れてくれるまで時間がかかる場合は、スプーンで口の中を刺激させる。

- ・口の中に食べ物を入れる前に、食べ物の説明をする。
- ・一つの食べ物を入れるのではなくおかずやごはんなどと二種類をスプーンの上に乗せる。

考察

<A さん>

- ・話し始めたら会話に合わせて、話が終わったらすぐに声かけを行い、食事に戻っていた。
- ・次の食べ物に入る前に「次の食べ物を入れても大丈夫ですか？」などの声かけを行ってまだ口の中に入っている時は、誤嚥しないように見守る。
- ・スプーンの柄の部分で介助者と一緒に持って、介助を行う方法はAさんの残存機能を活かすことになるのではないかと考える。

<B さん>

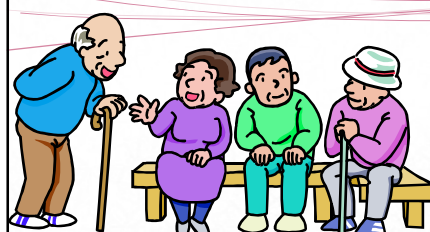
- ・刻み食をさらにスプーンで細かくすることで、あまり口の中に溜めることなくスムーズに食事を、行っていていただくことができると考える。
- ・一つの食べ物を入れるのではなく、おかずやごはんなどと二種類をスプーンの上に乗せて食べていただくことは、Bさんが飽きることなく食事をとっていただくことができると考える。
- ・刻み食という原型が少しわかりにくいという事もあるから、食べ物の説明をし、安心して食べていただくように行った。
- ・スプーンで口の中を刺激させることで咀嚼することを促す。

参考文献 川井太加子/生活支援技術Ⅰ基本編/株式会社メヂカルフレンド社/平成24年2月10日

<http://www.cans.zaq.ne.jp/haginosato/03kiwami.html>

利用者さんの状態に応じた食事について

実習施設:特別養護老人ホーム清山荘
2年7組 14番 加藤 桃香
19番 坂本 優紀



テーマ設定の理由

- 利用者さんの残存機能を活用しながらどのような工夫を行っているのか気になったから。
- スプーンなどの物品をどのようにして活用しているか知りたかったから。



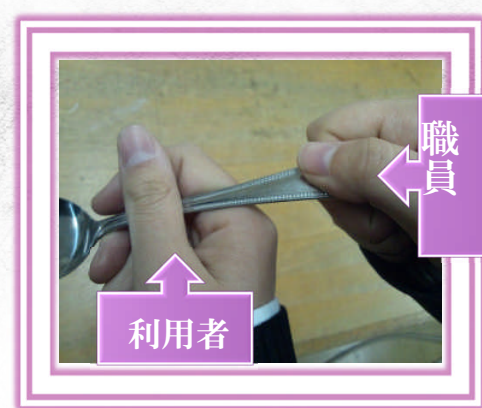
介護の実際



● 工夫点

- ・口の中に食べ物がないか確認。
- ・話し始める前に声かけを行いながら、次の食べ物を運ぶ。

Aさんの場合



● 工夫点

- ・スプーンの柄の部分で介助者も一緒に持って食べる。

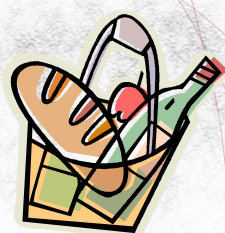
Aさんの場合(続き)



● 工夫点

- ・スプーンで口の中を刺激させる。
- ・食べ物の説明をする。

Bさんの場合



考 察



- Aさん
 - ・声かけ。
 - ・介助者も一緒に持って介助を行う方法は、Aさんの今できることをお手伝い出来るのではないかと考えた。
- Bさん
 - ・食べ物の説明をする。
 - ・スプーンには二種類の食べ物をのせる
 - ・スプーンで口の中を刺激して咀嚼することを促す。



